

# ウトナイ湖・美々川の湿地再生



研究第四部 主任研究員 剣持 浩高

ウトナイ湖は北海道苫小牧市の東部に広がる周囲17km、面積230haの二級河川（湖）である。湖周辺は鳥獣保護区に指定され、250種以上もの野鳥が確認されている。また、マガン・オオハクチョウなど日本でも貴重な水鳥の中継地であり、1981年に（財）日本野鳥の会が日本最初のバードサンクチュアリに指定し、1991年には日本で4番目のラムサール条約登録湿地に指定されるなど、日本ばかりでなく国際的にも貴重な湖である。

また、ウトナイ湖に流入する河川の中でも、特に周辺開発による人為的インパクトが大きい美々川は、千歳市駒里の湧水を源とし、湿原の中を緩やかに蛇行する自然河川の姿を呈している。

しかしながら、現状においてウトナイ湖及び美々川では、概略的に下記の課題が懸念されており、その確認や要因については、現地調査等を踏まえ検討中である。

- ① 水草の繁茂、湖内底泥の堆積
- ② 水深の減少
- ③ 周辺湿原の乾燥化、ハンノキの繁茂
- ④ 湖面積の減少

この貴重な湖や周辺湿地の保全・復元を図るため、北海道では平成14年度から自然再生事業をスタートさせており、さらに、専門的な視野から保全・復元の在り方につい

て指導・助言を行う「美々川自然再生技術検討委員会」を設立し、現在まで4回の委員会を開催している。

今後北海道において、課題等を踏まえて再生目標の設定や整備方針の立案など引き続き委員会を開催して検討を行い、ウトナイ湖及び美々川自然再生計画の策定を進めていく予定である。なお、策定の際には、流域住民・関係機関・NPO等の意見を聴取する予定である。



ウトナイ湖と美々川

# 石狩川下流における多様な自然環境の再生

前 企画・広報部 参事 今泉 浩史\*

かつての石狩川は、広大な泥炭性軟弱地盤で構成される低平湿地をゆったり流れ、洪水氾濫を繰り返してきた。その後の捷水路工事を中心とする治水事業の進展及び流域土地利用の変化により、低平湿地は生活、生産をはじめ北海道の中枢機能を担う一大空間に変貌したが、その過程で失われた自然環境も多いと考えられる。

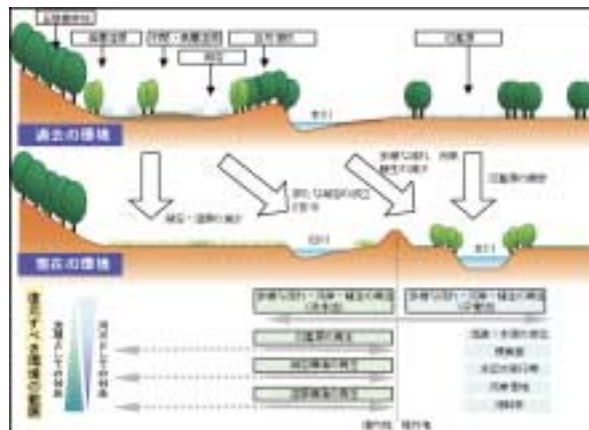
本検討は、石狩川及びその周辺低平地がかつて有していた自然環境を再生しつつ、治水事業の効果を高める自然再生の検討を行うものであり、平成14年度は、下流本川を対象に、河川及び流域環境の歴史の変遷を把握した上で課題を抽出し、自然再生の基本的な考え方を検討、提案した。

河川及び流域環境のデータを整理した結果、その歴史の変遷として、捷水路化に伴う河川の物理環境の単調化（瀬・淵といった流れの多様性、水辺の移行帯等の減少）、周辺低平地における湿地・湖沼環境、樹林ネットワークの消失・減少等の傾向が認められた。

また、生物（鳥類及び魚類）の確認種の減少傾向が環境上の課題として挙げられ、その傾向は、河川環境の単調化、湿地・湖沼環境の減少・消失等に起因していると考えられる。一方、治水的な課題としては、河道における流下能力及び河道流量の調節を目的とした施設整備の不足が挙げ

られる。

平成15年度以降は、対象範囲を上流及び主要支川を含む水系全体に広げた上で、治水機能の向上と減少・消失した環境機能の再生・向上の両立を目的に、旧川を活用した洪水調節施設及び生物多様性の場の保全・整備等、事業の具体化に向けた検討を行う予定である。



石狩川における自然再生の基本的考え方

※) 現 八千代エンジニアリング株式会社